

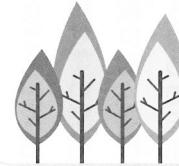
生きる意味
生きるから

生と死を “自分らしく”考える

第22回

花園大学

はし もと かず あき
橋本和明



筆者はこの一連のシリーズで、終わりや老い、死のテーマを取り上げながら、始まりや生についてのことを述べてきた。死を語る場合にまず生を語らねばならないし、終わりを話題にする際には始まりを持ち出さねばならない。生と死、あるいは始まりと終わりというこれらの問題は、言わば、図と地の関係にあると言えよう。この絵は「ルビンの盃」。という心理学の教科書ではよく出てくるものであるが、図だけを見ていると「盃」に見えるが、地の方に目を移すと「向き合った顔」に見える。つまり、同じ一枚の絵を見ても、見るものによって見え方が違う。生と死といった事柄もこれと同じで、「生の延長線上に死がある」、「生と対局に死が位置する」

といつた単純な割り切りだけでは通用しない。なぜなら、生と死でそれぞれまったく違う世界が広がつており、見ているものが違うからである。

これを少し引用しながら、生と死のことを考えていきたい。

この物語は、

「100万年も しない ねこがいました。
100万回も しんで、
100万回も 生きたのです。
りっぱな とらねこでした。
100万人の 人が、
そのねこを かわいがり、
100万人の 人が、
そのねこが しんだとき なきました。
ねこは、1回も なきませんでした。」

(原文のまま)



ルビンの盃

さて、絵本に『100万回生きたねこ』(佐野洋子作・絵)がある。この作品は非常に有名なので、読まれた人も多いと思う。今回は

はサーカスの手品使いの、そしてある時は泥棒のというように、いろんな飼い主の猫だった。そして、その猫はいろんな理由で死に、飼い主は猫の死を悲しみ大泣きするものの、猫自身は死ぬことなんか平気で悲しくもなかつた。しかし、その猫に大好きな白猫の彼女ができ、彼女との間に子を授かり、幸せな家庭を持つことになつた。とら猫はいつまでも白猫と一緒に生きたいと思つたが、先に妻が死んでしまう。とら猫は夜も朝も大泣きし、100万回も泣いた末、最後は亡くなつた白猫の隣で動かず亡くなつていった。

少し解説をしながら話を振り返ろう。主人公であるとら猫は100万回も死ぬが、いずれも飼い主の所有物でしかなく、どこか自分

がないような生き方であった。そして、その結末に死を迎えるが、猫自身は死を嘆くことはなかつた。しかし、心から愛する白猫の出現により、主人公のとら猫は誰の所有物でもない、この私を実感して生きるとともに、愛する白猫のためにもいつまでも一緒に生きたいと願うのである。それ故に白猫の死が途端もなく悲しく感じられる。ここにこの物語の根底に流れているテーマがある。つまり、生をまつとうせずして本当の死はなく、死の方ばかりに目を向けていても生がわからぬ。

生も死も捉え方が難しい。生（あるいは死）のことだけを考えていたのでは、他方の死（あるいは生）がわからない。そのバランスも死についてもわかる範囲で考えてはどうだろうか。そこに、「自分らしく」考えてみることができれば、なおのこと良いではないか。

スは実に取りにくい。ややもすると、バランスを失してどちらかにすぐに傾いてしまう。これは人類が古今東西において直面するテーマとも言える。そこで、この生と死のバランスを保つコツは、「自分らしく」ということではなかろうかと思う。先ほどの絵本のとら猫がそうであるように、誰の所有物でもなく、また自分がためだけでもなく、自分

んなところかわからないが、死んでから生について考えられるかどうかもわからない。そうであるなら、せめて生きている時から生はもちろん、死についてもわかる範囲で考えてはどうだろうか。そこに、「自分らしく」考えてみることができれば、なおのこと良いではないか。

〈文献〉『100万回生きたねこ』

佐野洋子作、講談社、一九九七

という全存在をかけて生きること、それこそが100万回生きることよりも素晴らしいことを物語ついている。「自分らしく」という言葉を言い換えると、「偽りのない本当の自分」と言つてもいいかも知れない。

生きている時に死のことはわからないと言われるかもしれない。しかし、あの世はど

橋本和明

大学を卒業後、二十年以上も家庭裁判所で調査官として勤務し、少年事件や家事事件などの非行や虐待などの臨床に携わってきた。二〇〇六年から花園大学に奉職。臨床心理士。